

男の育児休業のすすめ

中央大学法学部教授
広岡 守穂



1. 男性の育児休業のすすめ

子どもができたら、しっかりつき合わなければ損である。子どもはあっという間に大きくなってしまふ。人生は一期一会というが、子育てこそ一期一会である。父親だろうが母親だろうが、子どもとはつき合わなければ損である。だから男性も育児休業を取って、暫時、しっかり子どもとつき合ってみたらどうだろうか。あなたの職業人としての人生は数十年にわたるだろう。その中のわずかの期間である。1カ月でも半年でもいいから父親として本格的に育児にかかわってみたらどうだろうか。

わたしは1カ月でもいいと思っている。1年間の育児休業期間があったら、はじめの11カ月は母親が取り最後の1カ月は父親が取るというのでいい。この1カ月が男性にとっては、「黄金の1カ月」になると思う。どうしてかという、育児休業はまたとない貴重な経験を提供してくれるからである。

わたしは育児休業を取得した何人もの男性から直接感想を聞いたが、「子どもとじっくり接した」「仕事と育児と、まったく違う時間の流れを経験した。人生が豊かになった」「人生観が変わった」「育児のたいへんさが身にしみてわかった。妻の気持ちがわかってよかった」等々、皆、異口同音に、育児休業を取ってよかったと話した。いままでに否定的な感想を述べた人は一人もない。

育児休業は男の人生を豊かにする。休業中の日々を想像していただければいい。赤ん坊の世話、料理、洗濯、買い物、こなすべき仕事は山ほどあるが、考えようによっては、いつなにをどうするか、自由時間をどう使うかなど、すべてはあなた次第である。あなたの人生の生きる力、いわば人生力がためされる。

2. 次の世代を育てる責任

育児休業は男の人生力をきたえ男の人生を豊かにすると書いたが、いやそれよりなにより、わたしたちには次の世代を育てる大事な責任がある。

わたしたちはその責任ということに無自覚になりすぎていないだろうか。子どもが問題を起こしたら、子育てのことはまかせていたのにと妻を責める夫がいる。学校の先生に子どもを叱ってくださいと頼む母親がいる。そういうのは親としての責任逃れではないだろうか。親は子どもを一人前の人間に仕立てて社会に送り出す責任がある。それはあなたが会社で与えられている責任より、たぶんずっと重いだろう。

では、どんな子どもに育てるか。そうなると人それぞれ、人によって考えは違う。わたしはと聞かれたら、ころざしの高い人間になってほしいと答えることにしている。

子育てというと、わたしたちはつい自分の子どもを育てることばかり考えてしまうが、それではいけない。地域のおじさん、おばさんとして、大所高所に立って考えることも忘れてはならない。なにしろ少子化がすすみ、1年間に生まれてくる子どもの数が120万人弱と、ひところの半分以下になってしまった時代である。子育て中の母親の多くが、たった一人子育ての負担を押しつけられ、孤立し、悶々としている。育児不安や児童虐待に追いつめられることも少なくない。女性が働きながら子どもを育てようとしたら、相当の負担を覚悟しなければならない。子どもを育てるのにかかる金銭的負担も馬鹿にならない。といった理由が重なって、いまや1人の女性が一生の間に生む平均の子どもの数を示す合計特殊出生率は1.32まで落ち込んでしまった。

なぜそうってしまったのか。子育ての現状についてきちんとした認識を持っていたい。

昔は地域社会全体がみえざる保育園のようなものだった。わたしは昭和26年生まれであるが、学校帰りに近所の家にあがっておやつをもらったり、テレビをみせてもらったりしたものだった。まちでは年齢の違う子どもたちが大人数の集団をつくって、夕方暗くなるまで外で遊んでいた。子ども会があり、駄菓子屋があり、そろばん塾があった。

地域の大人たちの目が届いていた。昔から大勢の大人が子どもの面倒をみていた。そして年長の子どもが年下の子どもの世話をしていた。みんな子どもを預けるという意識のないままに、事実上、上手に子どもを預け合って育てていたのである。

いまはどうか。上にあげたことのすべてがなくなってしまった。1小学校区の平均の子どもの数はこの数十年で激減した。駄菓子屋はスーパーに姿を変え、同じ年齢の子どもだけ少人数で家の中で遊ぶようになった。つまり地域の子育て力がすっかり衰えてしまったのである。地域の子育て力が衰退したのに、子どもは上手に預けて育てるものだという意識は定着していない。そして「子どもは3歳まではお母さんでなければ」という、いわゆる3歳児神話が、若い母親たちを束縛し窮地に追い込んでいる。地域の子育て力の低下は、母親の負担を非常に重いものにしてしまったのである。

3. 仕事とくらしのバランスを取り戻したい

さて少子化はなぜすすむのか。最大の理由が日本人の働き方にあることは、客観的に考えたらだれの目にも明らかであろう。地域の子育て力の低下についてみてきたが、それでも日本はけっこう子育てにやさしい社会なのである。たとえば保育所という世界に例をみないすぐれた制度がある。小学校低学年の子どもでも1人で登下校している。親が送迎しなくてもよい程度に安全である。それなのに子どもを生み育てることに尻込みする人が増えているのは、どうしてか。やはり働き方に問題があるのである。

仕事とくらしの2つをはかりにかけてみると、日本人の場合は仕事の方が重い。仕事とくらしのバランス（英語でワーク・ライフ・バランスという）がとれていないのである。長時間労働と仕事優先の行動様式、家族のふれあいを軽んじ、地域社会のつきあいを疎んじ、もめごとが起こると原因を他者に求める、そんな思考様式が広がっている。そのためにくらしが圧迫されている。

逆に言うと、くらしに負担をかけることによって、会社は身軽になり有利な条件を得、それによって発展してきたのである。職場の人間関係を重視しない人は少ないから、ストレスのほとんどは

仕事からみで発生する。隣り近所のつきあいを会社のつきあいより優先する人はあまりいないだろう。子どものことで先生にくってかかることはできても、同じ口調で上司に文句を言える人はほとんどいないだろう。

仕事によるくらしの圧迫は、夫婦を分断し、男女をわけるといふかたちで行われてきた。つまり、会社はあなたに対して、家族みんなが食べていけるだけの給料を支払っている。だからあなたは家庭のことは顧みず、ひたすら会社のために働くべきだ。家庭はあなたの妻が守ってくれるだろう。というわけである。そういうかたちで、男たちが仕事に献身し、女たちが家事育児に専念する体制をつくりあげてきた。会社は男社会、そのかわり家庭は女が守る、というシステムである。こういう男女分断を性別役割分業という。

会社が男社会になった背景には、女性には妊娠出産という仕事があるから、仕事に徹底することはできない、だから男性のほうが会社の戦力になるし、男性を会社の基幹戦力にするほうが生産性が高くなるという考え方がある。先に会社は身軽になり有利な条件を得た、と書いたのはそういうことである。

こういう考え方はこれからは通用しないだろう。微視的にみても有能な女性が妊娠出産のためリタイアするのは非効率だし、巨視的にみたら目先の経済的利益を追いかけるのは個々の会社にとっては効率的でも、その結果急速な少子高齢化をもたらす巨大な負荷に社会全体があえぐことになるのは賢明ではないし、非効率である。

これからの会社の労働力は男性中心という等質性に依存するのではなく、多様なバックグラウンドを持つ人々から構成されるのがいいという考え方がある。ワークフォースダイバーシティ（労働力の多様性）という。老若男女、障害者、外国人、いろいろなマイノリティなど、様々な属性の人が働いているほうが、生産性はあがるという考え方である。

生産性ばかりではない。ワークフォースダイバーシティは、どんな人にも働く機会を提供するという意味でも重要である。あなたは障害があるからとか、あなたは歳をとっているからとか、それだけの理由で働くチャンスを閉ざさないこと、多

くの会社がそういう方向を目指すようになったら、と思わずにはいられない。

4. 男性の育児休業の効用

男の育児休業の効用を、もっと具体的に考えよう。

結婚して子どもが生まれたころから、男と女の間には少しずつ溝が広がっていく。子どもは男女の結びつきをいっそう強くするはずである。ところが、逆に、子育て期をとおして、夫と妻、男と女の間にはいつしか見えない壁のようなものできてしまう。

2人の間に溝ができる最大の理由は、子育ての本当のたいへんさを男性はなかなか理解も実感もできないことにある。男性の多くには、子育ては楽しい仕事だという思い込みがある。女性は可愛い赤ちゃんと四六時中いっしょにいられるのだから、たとえ大変でも、根本的にはしあわせでないはずはないと信じている。

そんな思い込みがあるので、男性は子育てのたいへんさがなかなか理解できない。いきおいパートナーに対する思いやりも、不十分になりがちである。それどころか、毎日会社で忙しく働いている自分のほうがずっとたいへんだ、と考えている男性も少なくない。そうすると、妻にねぎらいのことばをかけるどころではなくなる。よく女性は、ちょっとしたねぎらいの言葉をかけてくれるだけでもいいのに、というが、そのちょっとした心遣いさえおろそかになってしまう。

ところが、いまの子育ては本当にたいへんである。24時間たたかえますかの世界である。いつも赤ん坊といっしょにいて、ミルクを飲ませおしめを取り替え、ミルクを飲ませおしめを取り替えというのくり返しである。赤ん坊が夜泣きしたら、どんなに眠くても起きなければならない。泣きたいような気持ちで母乳やミルクを飲ませている。あのころいつも、つれあいが言っていたのは「一度でいいから、ゆっくり眠りたい」ということだった。

父親が育児休業を取って、本当に24時間子どもとつきあったら、夫婦の思いやりはもちろん、子育てに対する見方も大きく変わるだろう。男性が育児休業をとることの効用である。

男の育児休業にはもっと重要な効用がある。それは子育てが女性の人生のコースを窮屈にしないように夫がささえ、子育て中の女性を母親という役割の中に閉じ込めないということである。母親の子育てを支援するだけでなく、彼女自身の自分育てをささえるということである。

5. 妻の自分育てを夫がささえなければ、だれがささえるのだろうか

私事で恐縮だが、最後にわたし自身の経験を書いてしめくりたい。わたしのつれあいは長く専業主婦だったし、わたしも育児休業をとった経験はない。しかしこれから書くことは、きっと共働きの夫婦にも共通することだと思う。子育ての役目を分かち合うことが、どんな意味を持っているか、その点で共通するものがあると思うからである。

実はわたしは学生結婚して5人の子どもがいる。つれあいは大学を中退、ながいあいだ専業主婦だったが、38歳で仕事をはじめ、いまはバリバリ働いている。

3番目の子が生まれて1年後、ある日のことだった。つれあいは、新宿の経理学校に通い始めた。自分は子どものころから数学が得意だったから、子育てが一段落したら計理士になりたいのである。20代半ばすぎのことだった。初日こそ、たいへん上機嫌で帰ってきて、どんなことを教わったか、生徒は若い人たちばかりではないなど、熱っぽく語っていた。しかし三日坊主に終わった。

2～3年たったある日、今度は司法試験の勉強を始めるといって、法律学の本を読み始めた。彼女は主婦から弁護士になった女性に出会って、すっかり影響を受けたのである。「わたしも彼女にあやかって司法試験の勉強をしたい」と言って、法律学の勉強を始めた。そしてこれも3日で終わった。

それからまた2～3年たった。4月のはじめ、彼女は台所のテーブルにラジオを持ってきて、英会話の勉強を始めた。これからは国際化の時代だから、かんたんな英会話くらいは話せなければ、というわけである。

わたしはついからかってしまった。

「また三日坊主が始まった。最初は計理士で、次が司法試験で、今度は語学。どうせ今度も三日坊

主だろう。』

すると彼女はぼろぼろと涙を流して、その日はそれきり一言も口をきいてくれなかった。何を言っても返事は返ってこなかった。彼女がかたく口をつぐんでしまい、とりつくしまもなかった。夜遅くまで、台所のテーブルでポツンとしていた。

言わなければ良かったと、わたしは後悔した。そしてそのとき初めて、わたしは気づいた。これまで彼女は「このままでは干からびてしまう」とか「社会の風に当たりたい」とよくこぼしていた。それは子育て中のフラストレーションからくるのだと思っていた。でも、どうも違うのではないか。

子育ては24時間体制である。子どもは夜泣きもすれば病氣もするし、24時間つき合わなければいけないし、そのフラストレーションがたまって、ときどき爆発してあんなことを言っていたのだと思っていた。しかし、そうではないのではないか。

彼女は次々と子どもが生まれて、ずっと子育てに追いまわられてきた。子育てに一生懸命になればなるほど、自分自身にかかる時間がなくなる。ふと浮かんだ言葉が、子育てに対比する意味で自分育てという言葉だった。子育てに一所懸命になればなるほど自分育てがおろそかになる。そのことに彼女は何とも言えない不安を感じていたのだ。ということそのとき初めて痛切に感じた。

わたしは思った。自分は、10年近くもいっしょに暮らしているながら、どうして彼女の気持ちから分からなかったのだろうか。彼女は自分育てをしたいという気持ちから何度も三日坊主をくり返してきた。「社会の風に当たりたい」とか「干からびてしまう」というのは、ただ24時間子どもとつき合っているからたいへんというだけではなくて、むしろ自分自身にかかる思いがいつまでたってもかたちにならないことに不安で不安でならなかったから出た言葉なのだ。

そしてさらに思った。もし自分の妻が自分育てをしたいと思ったら、真っ先に夫がそれをバックアップしなかったら一体だれがバックアップするのだろうか。そう思うと、これまでの10年間、取り返しのつかないことをしてきたような気がした。なんともいえない後悔の念がこみ上げてきた。

これはわたしたちにとっては大きな事件だった。

それから先、彼女はすぐに何かできたというわけではないのだが、わたしの姿勢はガラッと変わった。夫婦の関係も大きく変わった。

彼女が仕事を始めたのは38歳のときだった。最初はかんたんな編集の仕事だったが、だんだん大きな仕事に取り組みようになっていった。それから夫婦の関係が少しずつ変わった。おもしろいのはお互いの呼び方が変わったことで、結婚するまでは「きみ、ぼく」「あなた、わたし」だったが、子どもが生まれた途端に「パパ、ママ」になり、彼女が仕事を始めたらどちらからともなくファーストネームを呼び捨てにするようになった。

結婚以来18年間、彼女は専業主婦だった。ずっと子どもを育てるのに追われていたから、彼女は仕事を始める前後、たいへん自信を失っていた。仕事を始めてからも、ちょっと失敗するだけでパニックをおこし、「自分は十何年間も子育てばかりやってきて、仕事の経験がないからダメなのだ」と、しょっちゅうくじけそうになっていた。彼女ばかりではないだろう。自己評価が低い女性は少なくない。

だから夫は子育て中の妻が自信を失うことがないように、いつも彼女をバックアップすることを忘れないでほしいと思う。これからの家族は、片方が片方を一方的にささえるという時代ではない。お互いにお互いの自分育てをささえる。夫が妻の、妻が夫の、それぞれの自分育てをささえる。親子子どもの自分育てをささえるのが子育てである。お互いにお互いの自分育てをささえ合っていく。家族というものは本来そういうものなのだと思う。夫婦がお互いの自分育てをささえあう、そのための育児休業なのである。

----- 広岡 守穂 (ひろおか もりほ) -----

中央大学法学部教授。専攻は政治学だが、政治経済に限らず現代日本の社会現象に幅広い関心を持っている。最近のテーマは男女共同参画とNPO。

子どもたちの成長を描いた『男だって子育て』(岩波新書)で91年ベストメン賞受賞。他の著書に『父親であることは哀しくも面白い』(講談社)、『妻が僕を変えた日』(フレベール館)、『近代日本の心象風景』(木鐸社)など